

2 0 2 6 年 度

一般選抜 後期入学試験問題

〔 国 語 60分 〕

注 意 事 項

1. 解答開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。
2. 解答用紙への記入は、黒鉛筆またはシャープペンシル（黒い芯に限る）を使用すること。
3. 解答開始後、解答用紙の所定欄に個人番号、氏名をはっきり記入すること。
4. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁がある場合や、問題について質問がある場合には、手を挙げて監督者に知らせること。
5. 解答終了の合図と同時に解答用紙を机上に伏せること。
6. 問題冊子は回収するので持ち帰らないこと。
7. 不正行為があった場合には、受験したすべての科目の成績を無効とする。

高崎商科大学短期大学部

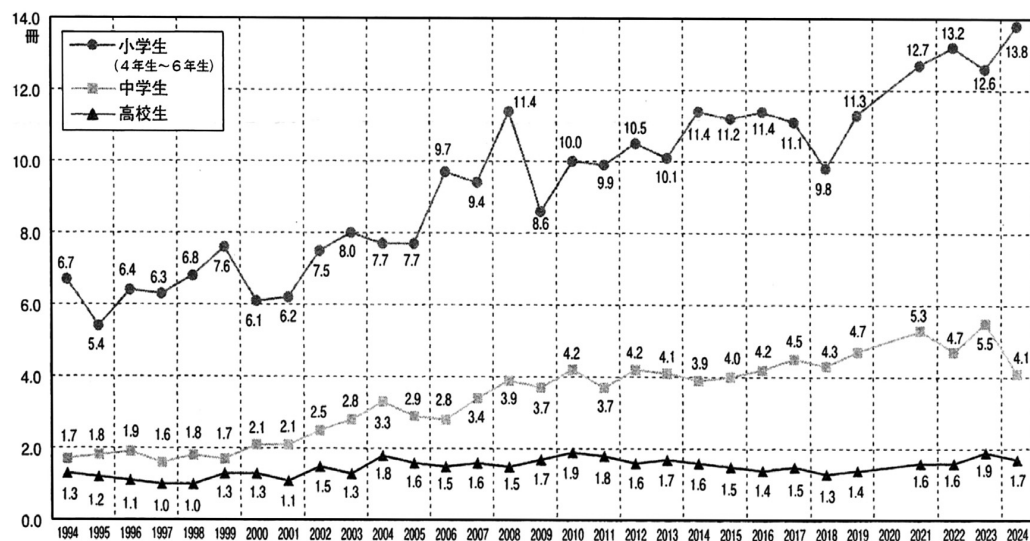


図1 過去31年分の5月1か月間の平均読書冊数の推移

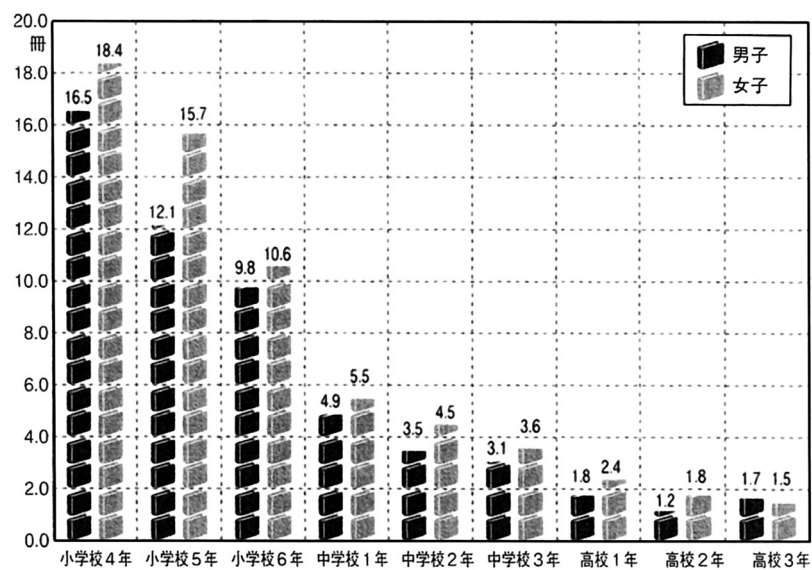


図2 学年別・男女別5月1か月間の一人あたりの平均読書冊数

【資料1】「特集 子どもの読書の現状(第六九回学校読書調査報告)」(『学校図書館』第八八九号、二〇二四年十一月号) 図1・図2(二七頁)、図3(二八頁)

[構想メモ]

読書の可能性

商大太郎

はじめに

目的：読書の可能性とは何かについて明らかにする。

1 読書の現状はどうなっているのか

2 読書の可能性とは何か

おわりに

第一問 太郎さんは、「読書の可能性」という題で、レポートを作成するための「構想メモ」を準備している。【資料1】及び【資料2】【資料3】は、引用するための統計結果や考えをまとめるための参考文献の一部である。これらを踏まえて、後の問いに答えよ。

国

語

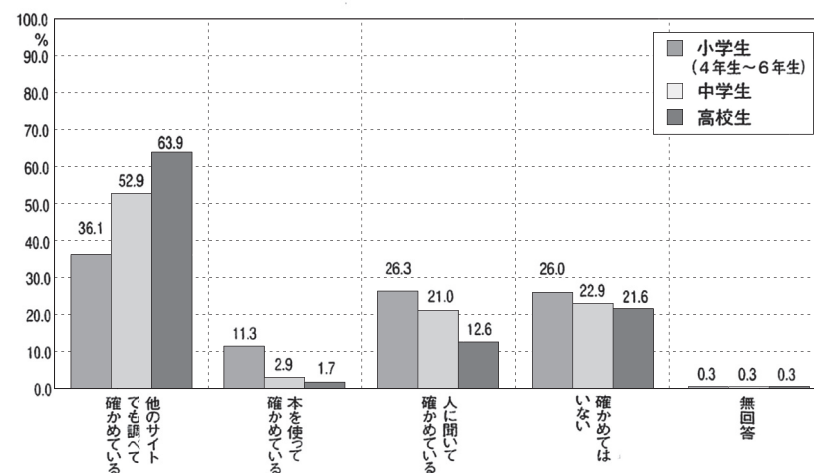


図3 パソコンやスマホ、タブレットで調べた内容が正しいかを確認しているか (2024年)

【資料2】『読書論』(佐古純一郎、教文館、一九七二)。

読書とは、文字どおり書物を読むことであるわけだが、いったい読むという行為の本質はいかなるものであるだろうか。書物は活字によって記された文字がならべられたものとして、単なる物的存在にすぎないともいえるであろう。そういう文字を読むということは、文字として記されている言葉があらわしている意味の世界に踏み入るということである。意味の世界は、もはや単なる物的存在ということとは出来ないものであって、それは形而上的な領域と考えることがゆるされるよう。それはその書物を書いた人の人格の領域に属するのであって、読むという行為において私たちは作者の人格の世界に入り込んでいくのである。そこに読書の醍醐味があるといえよう。私にはそれは作者との対話のよろこびとして感得させられるのである。書物が単なる物的存在として意識されている限り、まだ読書は入口で立ちどまっているのである。作者の心の世界に入っていく、そこで作者との対話が始まる時、もはや書物は単なる物的存在ではなく、それは一種の対話の場所という性格を帯びてくるのである。そのような対話性にまで読書を深めていくことが、心の生活としての読書の大事な点であると私は考える。

対話とは言葉において人格と人格とがふれ合うということである。心の深いところで生じる通じ合いといってもよい。ただ言葉がかわされているということだけでは、対話が成り立っているといえない。言葉をなかだちとして、「わたし」が真実に「あなた」と出会うということが対話の意味なのである。読書において私たちは、作者とのそのような出会いの体験を持つことがゆるされるのである。いや読書をそこまで深めていくことが大きなことなのである。私の心をそのような読書に開眼させてくれた読書論がある。それは小林秀雄氏の「読書について」という文章であった。小林氏はこんなふうに書いている。

小説の筋や情景のおもしろさに心を奪われて、これを書いた作者という人間を決して思い浮べぬ小説読者を無邪気と言うなら、なぜ進んで、たとえばカントを学んで、カントの思想に心を奪われ、カントという人間を決して思い浮べぬ学者を無邪気と呼んでいけないか。読書の技術のつたないために、書物から亡霊しか得ることができないのである点では、決して甲乙はないのである。サントブーヴの教訓を思い出そう。

「ついに著者たちはかれら自身のことばでかれら自身の姿をはっきり描き出すに至るだろう」それが、たとえどんな種類の著者であつてもだ。ついに姿を向こうから現わしてくる著者を待つことだ。それまでは、書物は単なる書物に過ぎない。小説類は小説類に過ぎず、哲学書は哲学書にすぎぬ。

書物から人間が現われるまで待て、と小林秀雄氏はいましめてくれるのであるが、待つといっても、机の上に書物を開いて、ぼかんと待っているでも、書物から人間が現われるわけではないのであって要するに、そこまで読みを徹底せよということなのである。

読書に対話性において為すという場合、大切な姿勢は、耳を傾けて聴くというへりくだった心をもって書物に向うことである。しばしば私たちは、勝手に自分の意見を書物に読みこむことよってとんでもない意味をその書物からひき出している場合がある。それでは著者との対話は成り立たない。現実の生活においても対話の成り立つ条件は、先ず相手の言葉に対して、一〇〇パーセント耳を開いて聴くということであろう。聞く耳を持つ、といってもよいかもしれぬ。お互いに自分の意見だけは主張したがっても、相手の言葉に耳を傾けることをしたがないのが、今日の状況なのかもしれない。まず相手の言葉に耳を傾けるということが、学ぶ者の態度である。読書を意義あらしめるものは、何よりもそのような学ぶ、という心なのではなからうか。

現実の対話では、相手は一度だけしか語ってくれないであろう。同じことを何度も尋ね訊くことはたいへん失礼なことである。読書のありがたい点は、何度でも、了解がつくまで聴くことができることである。文字どおり、何度でも繰り返して読むことができるのである。わからないということは、多くの場合、読みが足りないということである。古人が「読書百遍意自ら通ず」といったのは、たしかに読書の知恵をのこしてくれた貴い体験の告白というべきである。文字どおり百遍読んだのである。百遍読むことで、書物の向うから現われてくる人間を待ったのである。それは今日も変らない読書の初心といつてよいものなのであろう。初心忘るべからず、ということがあるがその意味が自ら通じるまで、読むという行為に自らをゆだねたいものである。

対話としての読書において、何よりも大切な態度として、学ぶ、心、ということをおぼえてきたのであるが、さらに、そのことを発展させるとき、そこにもうひとつ、問う、ということが考えられるのである。学問する、ということが、文字どおり、学ぶことと問うことを意味しているのであるが、「われ問い、汝答う」というところで、「わたし」と「あなた」との対話は成り立つものである。問う心は真剣に答を待つ心でなければならぬ。答を聴くことなしに、せっかちな独断で思い込みの判断を下すことはつしむべきことである。書物を読んでいて、わからないことがしばしば出てくるであろう。もちろん、言葉の一般的な意味がわからないというようなことについては、字引きのようなものについてわからせることもできる。しかし、著者自身がそこで何を表現しようとしているかは、著者自身に問うほかないのである。読むことに聴くという意味があつたように、さらにまた、読むことには問うという意味があるのである。問うときに答えられる。そこに対話ということが成り立つのだというべきであらう。

【資料3】 内田義彦（一九八五）『読書と社会科学』岩波書店。

そこで早速第一の問題に入りますが、「読む」と一口にいつても、読み方に二通り、根本的に性格が違う読み方があると思うんです。ここ（黒板）に書いた「（A）」として読むの「（B）」として読むの二つです。

厳密にいうと「（A）」として「というのはいずれも古典を読む場合でも、じつは本にふくまれた情報を読むので、ただ情報の性格、受けいれ方が違うだけからです。それで情報ということばを避けて「案内・旅行案内などという場合の案内ですねーとして」と言おうかとも考えたんですけど、案内という言葉は、少くともいまの方には、あまり常識になじんでいない。ピンとこないと思うんです。問題を根本から鮮明に意識に浮かび上らせるためには、ピンとくる日常語こそ重要なので、情報の語をえらびました。専門語としての情報ではない。「住宅情報」とか「アルバイト情報」などという場合の日常語として使用していると御承知下さい。

住宅やアルバイトの他にも自動車やステレオさらには投資に関する情報誌がいっぱいあります。投資などといって軽蔑しないで下さい。あのベートーヴェンが、ナポレオン戦争という、ややこしい戦争のややこしさを一手にしょいこんだ感のある複雑怪奇な占領下のウィーンで、生計の基礎の安定を求めてウロチョロしている姿はほほえましくも感動的で、その面の理解を欠くとベートーヴェン理解は本ものにならないでしょう。

以上は暮し・私生活についての情報誌ですが、同様の情報誌が政治や公経済に関してもある。この種の情報誌は、取扱う中身が中身のため固くて難解になります。情報誌としての性格そのものは同じ。あるいは、さらに、学問の世界、

学界での研究状況について「案内」のかたちでの情報・インフォメーションを得るために本を読む場合もある。学界展望などそれです。

それら広狭硬軟さまざまなものを一括して、「（A）として読む」としました。思想や思想家に関する研究書あるいは古典などでも、そういうものとして情報を求めて必要なところだけを読むこともありますね。案外多い。事実、必要でもあります。その限り、それもまた「（A）として読む」の項目に一括している、と御承知願います。

ところが、これとはまったく違った本の読み方がある。新しい情報を得るという意味では役立たないかもしれないが、情報を見る眼の構造を変え、情報の受けとり方、何がそもそも有益な情報か、有益なるものの考え方、求め方を――生き方を含めて――変える。変えるといつて悪ければ新しくする。新奇な情報は得られなくても、古くから知っていたはずのことがにわかに新鮮な風景として身を囲み、せまってくる、というような「読み」があるわけです。哲学者は万人の（すでに）知ることを語る、といえますね。古くからの情報を、眼のも少し奥のところでは受けとることによって、自分の眼の構造を変え、いままで眼に映っていた情報の受けとり方、つまりは生き方が変わる。そういうふうには読む読み方を、「（B）として読む」という名に一括しました。分野ではなく、読み方で分けている点に御注意願います。

さきに、思想書あるいは古典をもまた（案内という意味での）情報として読むことがあることに注意しましたが、案内に属する本・報誌誌でもまた、私のいまの分類では、読み方次第で「（B）として」読む部類に入ります。「案内」を表看板にかかげた本でも、優れた本は、一般に、本をていねいに――私の分類では「（B）として」――読む読者を前提とし、そういう読みに応えうるような中身――古典としての性格と内容――をもっていることにも御注意申上げておきましょう。

そういうふうには、じつさいは連なっている。その連なっているものを、かりに、――問題を鮮明に浮かび上らすために――分けただけです。

問一 太郎さんは、「構想メモ」の「1 読書の現状はどうなっているのか」として【資料1】からわかったことをまとめようとしている。太郎さんが書くこうとしている文章中の空欄に入る、最も適切なものを、次の〈語群〉ア～サのうちから選び、カタカタナを解答欄に記入せよ。

〔構想メモ〕

1 読書の現状はどうなっているのか

平均読書冊数を図1により2023年と2024年とで比較してみると、（ 1 ）は増加し、（ 2 ）（ 3 ）は減少している。

図2によれば、学年別では平均読書冊数は男女とも（ 4 ）傾向にある。男女別の傾向を見ると、高校3年生以外は、（ 5 ）の冊数が（ 6 ）の冊数を上回っている。

また図3の「パソコンやスマホ、タブレットで調べた内容が正しいかどうか確かめているか」とたずねた問いに対して、「本を使って確かめている」とした（ 1 ）は、20%に達することなく、（ 3 ）は、（ 1 ）の7分の1に近い数値を示している。

〈語群〉

- | | | | | |
|---------------|---------------|-------|-------|-------|
| ア．児童 | イ．生徒 | ウ．小学生 | エ．中学生 | オ．高校生 |
| カ．学年が下がることに増加 | キ．学年が下がることに減少 | | | |
| ク．学年が上がることに増加 | ケ．学年が上がることに減少 | | | |
| コ．男子 | サ．女子 | | | |

問二 【資料2】の筆者が考える「読書」の考え方として、その内容が適当でないものを次のア～オのうちから一つ選び、カタカタナを解答欄に記入せよ。

ア. 「読書」において、勝手に自分の意見を書物に読みこむことは、作者と読者が互いに主張したがっていることになつてしまい、そこには意義がない。

イ. 「読書」は、物的存在として活字によつて記された文字から、作者の人格の世界に入り込む行為であり、そこは「対話の場所」の性格が帯びてくる。

ウ. 「読書」をする際には、作者との出会いの体験を持つことが許されるため、人格と人格がふれ合うという体験まで深めることが大事である。

エ. 「読書」においては、真剣に答えを「待つ」心が必要となる。わからないことを真剣に調べることによつて、作者への理解が深まる。

オ. 「読書」における大切な態度は「学ぶ心」と考えると、「問う」ということが考えられる。著者に問うことによつて、読むことと問うことという対話は成り立つ。

問三 【資料3】の(A)と(B)に入る最も適切な語句を本文中から抜き出し、それぞれ解答欄に記入せよ。

問四 太郎さんは、「構想メモ」の「1 読書の現状はどうなっているのか」、「2 読書の可能性とは何か」を踏まえて、「おわりに」を書こうとしている。【資料1】【資料2】【資料3】と明記し、その内容を踏まえて、想定される「おわりに」を、二三〇字以内（句読点や括弧を含む）で解答欄に記入せよ。

第二問 花子さんは、樋口一葉の人物像を調べることにした。花子さんと先生の会話文を読み、以下の問いに答えよ。

先生 花子さんは、人物研究にするのですね。では、誰を対象としますか？

花子 はい。私は、旧五千円札の絵柄にも選ばれていた、樋口一葉を対象としたいと考えています。

先生 そうなのね。樋口一葉は、明治五年に東京府で生まれた小説家。たとえば、「たけくらべ」を書いていますね。その他にも、(1)などの作品も発表しています。そう言えば、旧一万円札の絵柄は、(2)の著書で知られる福沢諭吉でした。明治初期には、現代の基盤を作る様々な出来事がありましたね。ところで、花子さんは、一葉の生涯をどのような観点から調べてみようと考えていますか。

花子 少女時代に焦点を当てて調べてみようと考えています。

先生 それはなぜですか？

花子 本をよく読み、周囲から優秀だと言われていた一葉が、なぜ学校をやめなければならなかったのかと疑問に思い、その問いにこたえを見出してみたいからです。

先生 なるほど。この時代を知るためのひとつの側面ですが、明治初年の日本の学校制度についていくつか確認しておきましょう。明治初年の日本では、近代学校制度を整備する法令等が出ます。なかでも明治五年に出た(3)は、現代の日本の学校制度の基盤となったと言われています。【図1】を見ると一葉は、明治一〇年に六歳から下等と上等に分かれている(4)に入学したことになります。ところが、せっかく入学した学校を一葉は、やめています。どうして退学したのでしょうか。

花子 はい。【資料1】には、「母たきの意見で学校をやめることになった」こと、「女子」に学問は必要ないと、母親が考えていたことなどが書かれていました。このことが、要因だったのではないのでしょうか？

先生 ここに、明治期の女子教育について書かれている本があります。一葉には士族としての教育が両親によって施されたと言われていますので、【資料2】を読んでみましょう。この時期の「士族の娘の教育」という立場から読み進めると「(5)」と書かれていますね。この視点から考えますと一葉が、なぜ学校をやめたと考えられますか。【資料1】【資料2】を使ってまとめてみましょう。

花子 わかりました。

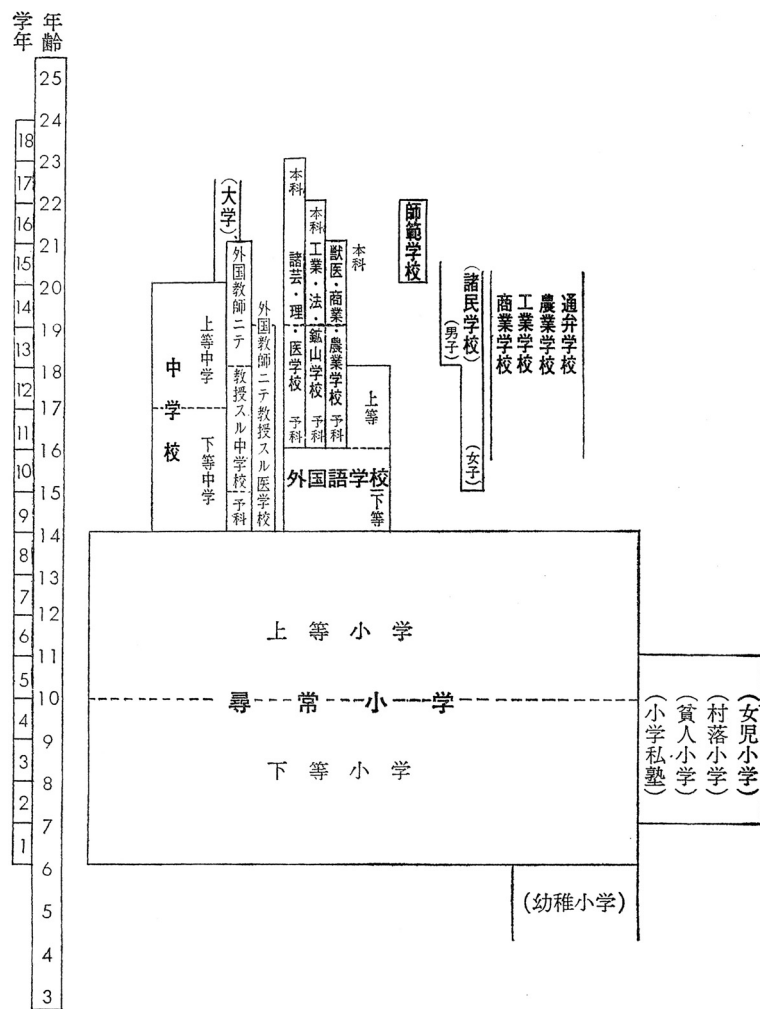


図1 明治6年（学制による制度）の学校系統図
（文部省『学制百年史 資料編』1975年、343頁より）

【資料1】菅聡子（一九九九）『時代と女と樋口一葉』日本放送出版協会

一葉はどのような少女だったのだろうか。日記『塵之中』^{（注1）}明治二十六年八月十日の項で、一葉は自分の少女時代から萩の舎入門までを自伝的に振り返っている。その記述に従いながら、一葉が自ら語る、その少女時代を追ってみよう。

「七つといふとしより草々紙といふものを好」^{（注2）}んだ一葉は、手まりや追い羽根といった女の子らしい遊びには見向きもせず、夢中で本を読んだ（以下、引用文中の年齢表記は数え年）。とくに好んで読んだのは「英雄豪傑の伝」や「仁俠義人の行為」というから、滝沢馬琴の読本なども知れない。一葉から国文の指導を受けていた穴澤清次郎は、「七つの歳に、三日で八大伝を読んだと申しますので、よく、そんなに早く読みあげたと私が云ふと、『眼がふたつあるから二行宛読めるでせう。ほ、ほ、ほ、ほ』と夏ちゃんが云ひました」（「一葉さん」『一葉全集』月報「一葉」二号、筑摩書房、昭和28）と回想している。

それらの影響からだろうか、「九つ斗」から「我身の一生の世の常にて終らむことなげかはしく、なんとか他の人々に抜きんでたいと思うようになった。周囲の人々からは「おとなしき子」「物おぼえよき子」とほめられるし、父親は自分のことを自慢にする、また先生は弟子のなかでも秘蔵つ子と遇してくれる、という状態のなかでは、まだ幼かった彼女が「天下くみしやす」し、「我事成就なし易」^{（注3）}しと思いが上ってしまったのも無理はない。日記のなかで一葉は、そのような自分を批判的に省みている。

この文脈の流れの上で一葉が強調しているのは、「利欲にはしれる浮よの人あさましく厭ハしく」^{（注4）}「これ故にかく狂へるか」と見れば金銀ほとんど塵芥の様に」^{（注5）}感じられる、という金銭万能主義といった姿勢に対する嫌悪感である。その背景には、父則義が生業としていた金融業への反感があるだろう。そのような反感自体が、少女時代の一葉の胸中でどのように醸成されていたのかは明らかではない。この金貸し業に対する倫理的反感は、後に『たけくらべ』で正太郎の家業が「高利貸」と設定されることに反映していよう。だがここで金銭への嫌悪がことさら強調されているのは、そのような父との関連からだけではない。それはこの日記を記している一葉の〈今・ここ〉とかかわっているのだが、その点については後にふれる。

さて、この自己語りの前半部分には、一つの挫折が語られている。それは学校教育との訣別である。本好きで学問を愛していた一葉だったが、十一歳のときに母たきの意見で学校をやめることになった。「女子にながく学問をさせなんハ行々の為よろしからず 針仕事にても学ばせ家事の見ならひなごせん」というのが母の言い分である。父の則義は「猶今しばし」とたきと言いつ争ってくれたが、結局一葉自身が「生れ得てこゝろ弱き身」であつたため、おそらく両親の板ばさみになったのだろう、双方にはつきりと希望を伝えることができず、死ぬほど悲しかったが学校はやめることになってしまった。〈女に学問は必要ない〉。これは現代に至るまで繰り返し口にされてきた、女性に対する抑圧の言葉である。後に作家として文学史上に不朽の名を残す一葉もまた、この言葉の前に挫折せざるをえなかった。一葉は後に、学校教育を途中で諦めたことを悔やんでいたと伝えられている。

【資料2】深谷昌志（一九八一）『増補 良妻賢母主義の教育』黎明書房

幕藩体制がゆらぎ、商品流通機構が整備された江戸末期になると、士族の女性といえども、読み書きの必要性が増加する。しかし、教育理論としては、知的学習を必要最小限にとどめ、女徳の形成を強調した。^{（注1）}しかも、民衆の女性ほど、家政の学習を必要としないことも、純度の高い女徳形成の教育に拍車をかけた。そして、のちの発展に関連していえば、徳の教育は本来学習者の自学自習、または教授者と学習者の小人数の関係を理想とするので、ここから学校形式の教育形態は発生しにくかった。

このような女訓—女子教育論は、理念（Sollen）として存在しただけではなく、現実の生活も強く規制していた。では、現実には、士族の家庭では、どのような教育が行われたのであろうか。二、三の伝記を手がかりとして、その状態を瞥見しよう。

安政四年、弘道館の教師、青山延寿の二女として生まれた青山千世は、満六才から、近くの私塾に通って、『いろは』『百人一首』^{（注2）}『女今川』^{（注3）}『女大学』^{（注4）}などの手本を習い、九才から、特に頼んで、知人の老婆について『孝経』^{（注5）}『大学』^{（注6）}『論語』^{（注7）}などを学習、さらに、一二三才から、縫い子として、お師匠さんについて正式な仕立てを学んだ。しか

し、彼女のように九才以後も学習したのはめずらしく、「女は学問はいらぬ、女は紺屋の付け紙が書ければよいといつて……女の子の文字の教育は平仮名に留まるのが普通」であった。

この青山千世の事例は、公的に制度化されていなくとも、士族の間には、満六才から手習い、一一・一二才から正式の裁縫など、慣習化された教育形態があつて、そこに多くの女兒が通学していたこと、そして、それらの女兒を教える女教師が存在していたことを示している。

長岡藩の家老の娘として生まれた杉本鍼女は、祖母から読み書きの初步を習い、その後、尼になる予定なので、師匠についてかなり高度の教育をうけた。しかし、「当時、女の子が漢籍を学ぶということは、ごくまれなことでありましたので、私の勉強したものは男の子むきものばかりでした」という。この場合、注目をひくのは、「家事は、とりわけ女の子の教育は、いつさい女の手にゆだねられておりましたので、父は、祖母の熱心な望みにたいしては、だまつて従つておりました」のように、女子の教育について母や祖母がかなりの発言権を握っている事実であろう。

竹崎順子は自宅で素読、手習いを学んでいるが、それとともに「幼ない女達は着物を与へらるるかはりに綿や繭を与へられました。各自にそれを紡ぎ、延べ、伸し、機にかけて織つたものです」のような、きびしい家庭教育を体験している。また、柳沢家の家老の家に生まれた井上芳子は、明治時代にはいつても、毎日、孫娘に『女庭訓』^(注8)を読ませ、正確に読み終らないと遊びにださないなど、いわゆる、士族風の厳格なしつけを与えた。

このように、(5)と考えられる。

〔注〕(1)「女徳」……女子として行なうべき道。

(2)「女訓」……女子としての戒めや教訓。

(3)『女今川』……江戸時代の代表的な女子のための教訓書。あるべき道を習い、実践するための手本となつたもの。

(4)『女大学』……江戸時代中期以降、広く普及した女子の教訓書。

(5)『孝経』……「経書」のひとつ。孔子の弟子・曾子が、孔子の言動を記録したもの。

(6)『大学』……「経書」のひとつ。朱子学において儒教を学ぶ基本的な教科書。

(7)『論語』……「経書」のひとつ。孔子の言動を、その弟子たちが記録したもの。

(8)『女庭訓』……江戸時代の女兒に、生き方や身のこなし方などを示したもの。

問一 (1) には、どの作品が入るか。次のア～オのうちから一つ選び、カタカナを解答欄に記入せよ。

ア. 舞姫 イ. みだれ髪 ウ. それから エ. にごりえ オ. 波

問二 (2) には、どの作品が入るか。次のア～オのうちから一つ選び、カタカナを解答欄に記入せよ。

ア. 学問のすゝめ イ. 西国立志編 ウ. 小説神髓 エ. 土 オ. 破戒

問三 (3) には、どの法令が入るか。次のア～オのうちから一つ選び、カタカナを解答欄に記入せよ。

ア. 教育令 イ. 諸学校令 ウ. 教育基本法 エ. 小学校令 オ. 学制

問四 (4) に入る語句を漢字で解答欄に記入せよ。

問五 (5) に入る文章を次のア～オのうちから一つ選び、カタカナを解答欄に記入せよ。

ア. 士族の娘たちは、師匠について読み書きや裁縫、点茶などを学ぶかわら、母や祖母から儒教女訓に基づいたきびしい家庭教育を課せられた

イ. 士族の家庭では、すべての権限が家長に凝集している一方で、農民の家庭では活動領域が二分され、女性の意見が反映された

ウ. 士族の場合には、家父長制度は成立しにくく、学校形式の女子教育が発展する基盤が町人層を対象として存在していた

エ. 女子には初歩的な読み書きの修得の場が必要であると期待されていたため、学校形式によるものより厳しい寺子屋(手習塾)が勧められた

オ. 学習者の自学自習や教授者と学習者の小人数の関係を女子の理想として教育が進められ、学校形式の教育形態への展開が容易であった

問六

花子さんは、樋口一葉の人物研究として、一葉が「なぜ学校をやめなければならなかったのか」という観点からまとめることにした。【資料1】【資料2】と明記し、それぞれからわかったことを記し、その内容を踏まえて想定されるレポート文を二七〇字以内（句読点や括弧を含む）で解答欄に記入せよ。

一															
問四													問二	問一	
														1	
														問三 A	
													3		
													B		
															5
														6	

個 人 番 号						氏 名	

二																			
問六															問五	問一			
																問二			
																問三			
																		問四	

評 点	
-----	--